

【懐徳】  
「わっせ、わっせ」

【ナレーション】  
わらじをはいた男が走っています。  
この村の助役(じやく)をつとめる小澤懐徳です。  
なにやら水引きでケンカがおこっているらしいのです。

## 江刺の小澤懐徳



【農民A】

「はなせ！」

【農民B】

「うるさい！おらの田んぼにも水をよこせ！」

【農民C】

「じょうだんじゃない、ウ千の稲が枯れちまう！」

【懐徳】

「やめろやめろー！なにやってるんだ」

【ナレーション】

懐徳はケンカをとめ、農民たちの話を聞くのでした。

【農民A】

「水はチョロチョロしか来ないのに、毎日カンカン照りで大変です。

このままでは稲が枯れてしまう。」

【農民B】

「北上川には水があんなにあるのに、村にはさっぱりだ。

あの水がつかえたらなあ。」

【農民C】

「日照りもこまるが、ちょっと雨が降っても水があふれて稲が流れてしまう。

その度に古い用水路はこわれるし…。

懐徳さん、なんとかないませんか？」

【ナレーション】

農民は口々に言いました。

【懐徳】

「わ…わしも、それはなんとかしたいと思っている。

ただし、ケンカはいかん、ケンカしても水がふえるわけではない。」

## 江刺の小澤懐徳



【ナレーション】

懐徳は役所にもどり村長とはなすのでした。

【懐徳】

「私は農業なしに国はない。  
農業は国の基と考えております。  
もっとも農業を活気づけたいのです。  
そのためには水が必要です。  
北上川から十分な水が取れるようにしなければなりません。」

【ナレーション】

ちょうどその頃懐徳に思いがけない好機会が訪れました。

【村長】

「懐徳、いい知らせだ。  
岩手県の代表として、耕地整理が進んでいる秋田県と山形県の視察に行ってくれないか？」

【懐徳】

「私かですか？」

【村長】

「ああ、君は若いころから農業のことを考えていたからな。  
きっと、今の問題を解決する糸口が見つかるはずだ。」

【懐徳】

「他の県の実例を見るんですね。  
なるほど！是非行かせてください。」



【ナレーション】  
懐徳は数ヶ月、秋田・山形をまわり勉強をしてきました。  
そして農民をあつめ北上川から水を取り入れる新しい用水路の計画をはなしたのでした。

【懐徳】  
「水の取り入れ口は北上川と和賀川の合流地点にします。  
そこから新しい水路を二千二百メートルつくり、今ある水路につなげます。」

【ナレーション】  
それを聞いて農民はびっくりです。

【農民A】  
「そんなに長く作るのは無理だ！」

【農民B】  
「だいたいあそこには大きな男山があるぞ」

【懐徳】  
「水を安定して取り入れるためには、この位置が最もよいのです。  
男山にはトンネルを掘ります。」

【農民A】  
「そんな無茶な！」

【ナレーション】  
農民たちは口々に反対しました。

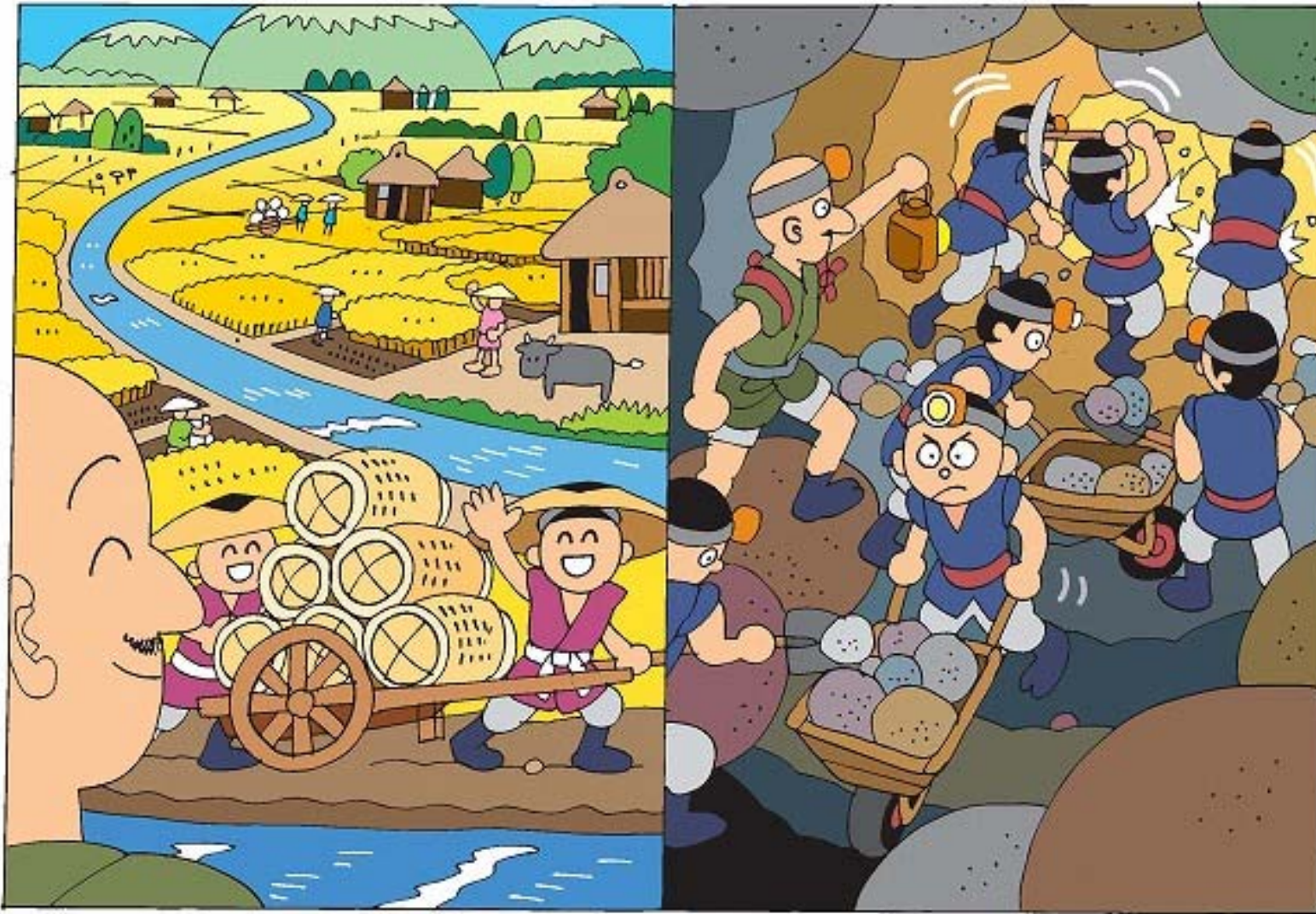
【懐徳】  
「苦労はあるかもしれないが、必ずみんなの暮らしを良くできる。  
これが完成して水が安定して来るようになれば、日照いで大切な稲を枯らすこともなくなる。

台風の雨で水浸しになることもなくなるんだよ。」

【農民B】  
「懐徳さん…わかった、信じるよ。」

【ナレーション】  
懐徳の熱意に農民は心を動かされ作業することにしました。

# 江刺の小澤懐徳



【ナレーション】

今のように機械があるわけでもなく、すべて人の手で進めていかなければなりませんでしたが、男山を掘る工事はとても大変なものでした。

しかし、農民たちがくじけそうになるたびに、懐徳は皆を励ました。

【懐徳】

「これが出来れば、米の生産量は多分2倍になると、がんばれ！」

【農民A】

「ほんとうかい懐徳さん！」

【農民B】

「おお！そいやるしかねえ」

【ナレーション】

そして工事を始めてから5年という長い年月をかけて、ついに水の取り入れ口と用水路は完成したのでした。

カラカラに乾いた土地には、沢山の水がゆきわたり、どの田んぼにも均等にとどきました。

【農民A】

「すごい、すごいぞ、懐徳さんの言うとおいだ」

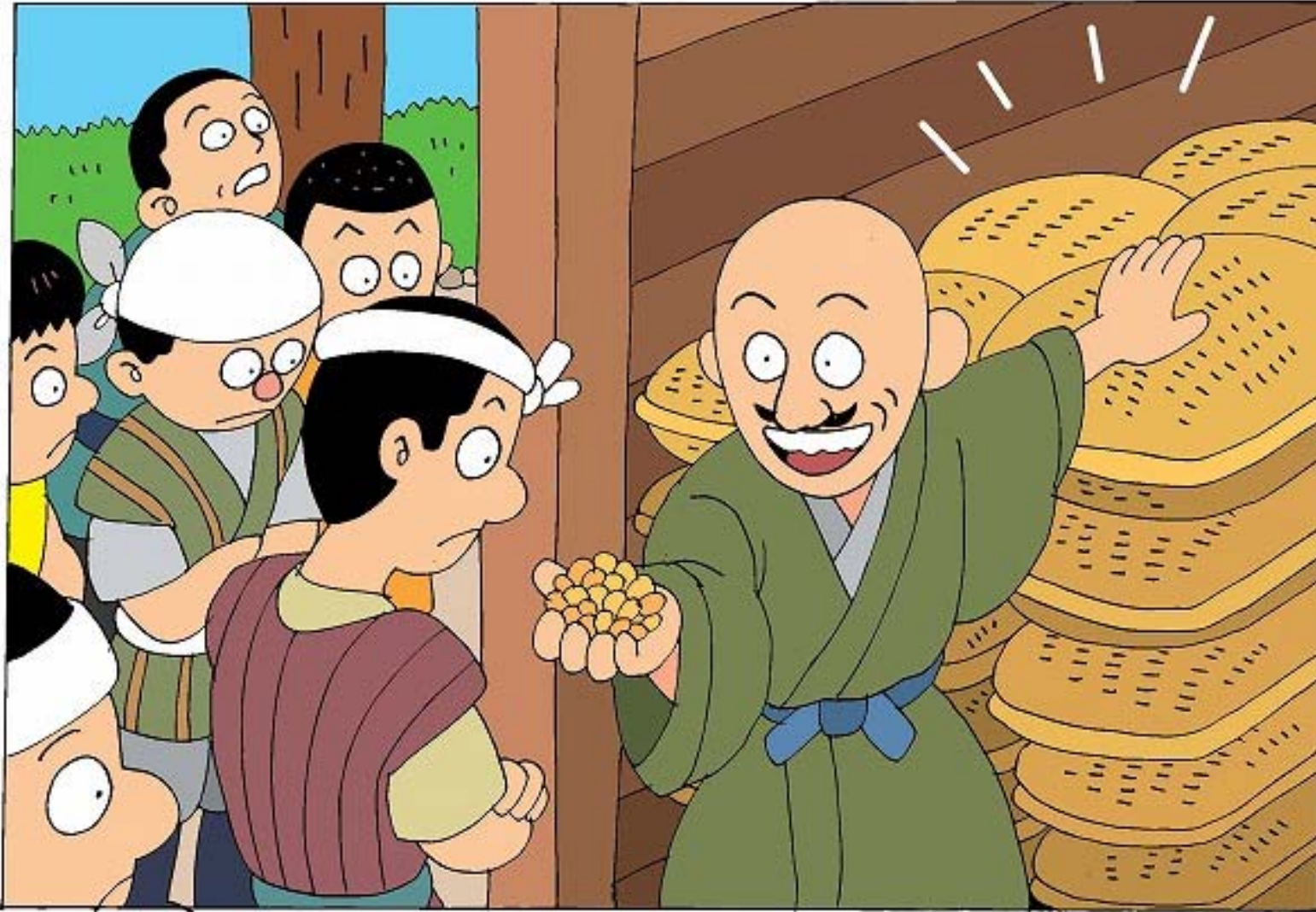
【ナレーション】

農民たちは大喜びです。

水が沢山とれるようになったので、田んぼもどんどん増え、510+しか取れなかったお米は2倍以上の1305+、米俵にすると二万二千俵も取れるようになりました。

しかし、懐徳はまだまだ満足しませんでした。

## 江刺の小澤懐徳



【ナレーション】  
そのころ、懐徳は村長になっていました。

【懐徳】  
「米は取れるようになったが、どうにもおいしくない…  
どうにかしなければなあ…」

【ナレーション】  
当時、江刺のお米は全国での評判は良くなく、安い価格でしか売れませんでした。

そこで懐徳は試験地を作り、色々な品種のお米をためしに作ることにしました。

【懐徳】  
「おおコシはいい、おいしいぞ！」

【ナレーション】  
そのお米の名前は「陸羽百三十二号」といいました。  
懐徳は少しでも早くこの米を広めたいと思い、自ら借金をし、大量に種もみを買ったのでした。

しかし農民たちは

【農民A】  
「う〜ん大丈夫かな…」

【農民B】  
「おらあ、今までの米でいいよ。懐徳さん」

【農民C】  
「つくいなれた米が一番だ。皆が成功したら、おらもやってみよう。」

【ナレーション】  
農民は新しい種もみが心配で、なかなか受け取ってくれないのでした。



【ナレーション】  
懐徳には借金だけが残ってしまいました。

【懐徳の息子】  
「父さん、みんなあんまり種もみを持って行かなかったね」

【ナレーション】  
そう言うのは、懐徳の息子です。

【懐徳】  
「最初だから仕方がない。  
みんな怖いのだよ。  
米が育たず貧しくなるのがイヤでな…。  
おい尺八(しゃくはち)をふいてくれ。  
♪酒飲めば～ いつか心は春めいて～ 借金といも鶯の声～  
♪」

【ナレーション】  
懐徳は酒を飲み、息子の吹く尺八にあわせて歌をうたいました。

ゴトン。

【物乞い【ものごい】】  
「だんなさま…おめぐみを…」

【ナレーション】  
物乞いがやって来たのでした。

【息子】  
「帰れ、帰れ、こっちがめぐんで欲しいくらいだ。」

【懐徳】  
「よいよい、苦しい時はおたがいさまだ。  
なにか食べさせてやれ。」

【ナレーション】  
懐徳は人情に厚い人間でした。

【懐徳】  
「ん！？さてよ、そうか！食べさせればいいのか！」



【ナレーション】

懐徳はひらめきました。

その年とれた「陸羽百三十二号」をもって、東京へ行き試食会を開催することにしたのです。

【懐徳】

「いらっしゃいませ！岩手は江刺のお米ですよー。  
おいしいですよー」

【客A】

「これはうまい！」

【客B】

「本当においしいお米だ、こんなおいしいお米ははじめてだ」

【ナレーション】

試食会は大成功でした。

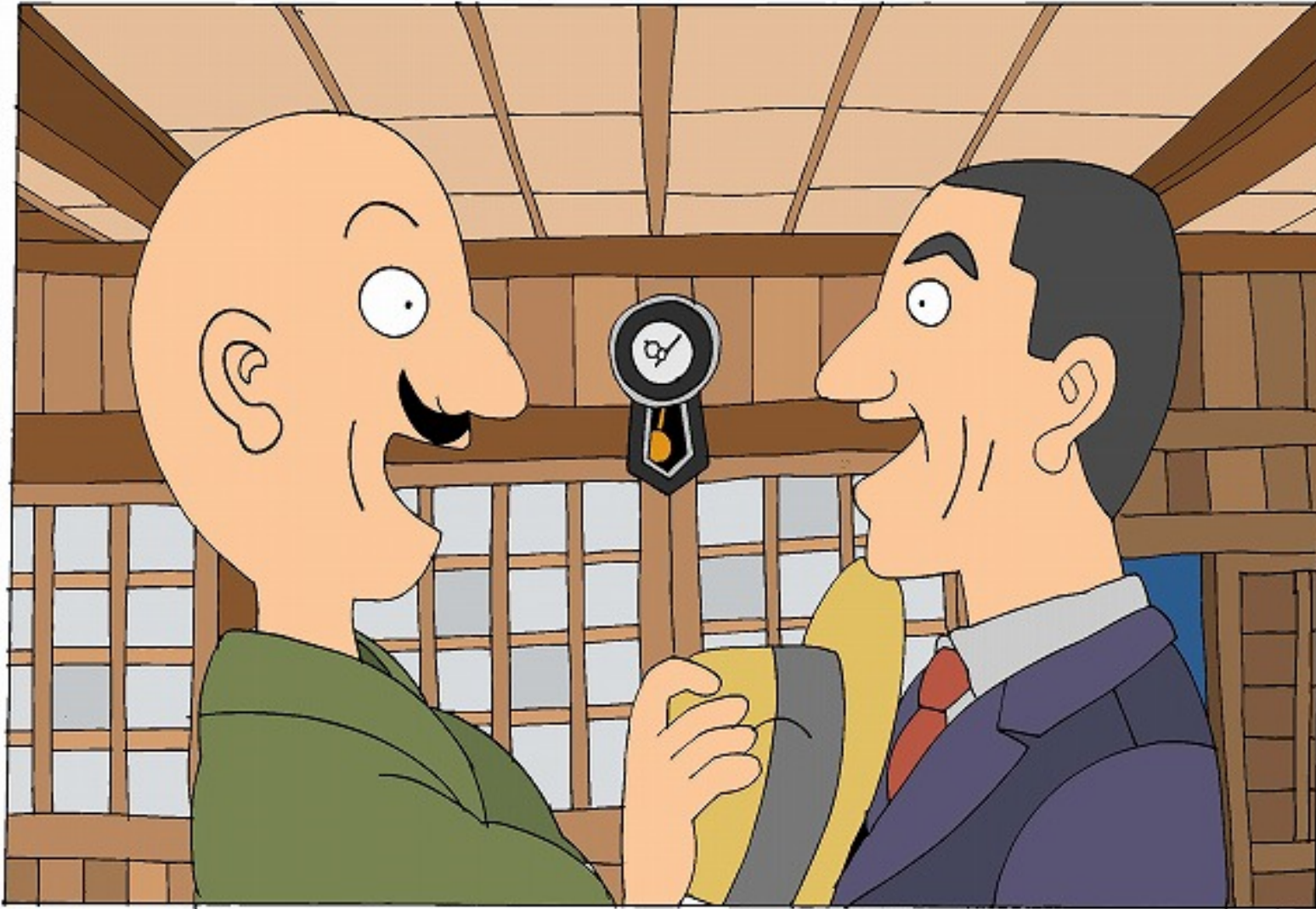
江刺のお米は「全国一美味しい」と評判になり、注文が殺到するようになりました。

農民たちは、みんなで新しい米をどんどん作り、村は活気づきました。

そして、これは他の地域の米と区別するため、金の札をつけて売ったことから江刺の金札米と呼ばれ今でも広く知られています。

水路をつくった事でずいぶん水の便が良くなり、美味しいお米も作れるようになってましたが、まだまだ水の届かない地域もありました。





【ナレーション】

そんなある日懐徳の家にお客さんが来ました。

【知事】

「こんにちは。懐徳さんはいらっしゃるか？」

【懐徳】

「はいはい。ああッ…あなたは！」

【ナレーション】

岩手県知事の国分(こくぶん)謙吉(けんきち)でした。

謙吉はその夜、懐徳の家に泊まり農業について語り合ったのです。

【懐徳】

「知事、東京はすいぶん近代化が進んで、華やかだと聞いておりますが、私は、農業無しに国はないと考えます。

農業が豊かにならずに、国が豊かになるとは思えません。

そして、美味しいお米は農民たちの努力のたまものです。

それを大切に、もっともっと、この江刺を発展させたいと思っています。」

【知事】

「そうですね、同感です。」

【懐徳】

「この辺は以前より良くなりましたが、人首川(ひとかべがわ)の方はまだまだ水不足です。

新しく水路をつくりたいと考えているのですが、大きな工事にないそうなので反対する人たちも出るかもしれません。

どうすべきでしょうか？」

【知事】

「そうですね。

しかし、何かをなしとげるためには強いリーダーシップが必要になりますよ。

まよいがあったのでは人について来ません。

あなたの信じた道をつらぬいてみてはどうです。」

【懐徳】

「なるほど…」

## 江刺の小澤懐徳



【ナレーション】  
それから数年がたったある夏の日、役場帰りの懐徳に農民たちがかけよって来ました。

【農民A】  
「今年は日照りが続きますね懐徳さん。」

【農民B】  
「この程度の日照りでも下の田んぼは乾いてしまう…。  
これ以上どうにもならないものですかねえ」

【懐徳】  
「ん～…なるほど…人首川の方だな、わかった。  
ちょっと行ってみる。」

【ナレーション】  
確かに人首川周辺は水が不足していました。

【懐徳】  
「この天候でも川向かいの胆沢では、まあまあ豊作。  
むこうは水路の大規模な改修をしている。  
同じ天候でこれだけ違うのであれば、我々も考えるべきではないだろうか？」

人首川まで水路を拡大してはどうだろう。  
館山下をトンネルにすればいいのではないだろうか…。」

【ナレーション】  
懐徳は農民たちの苦勞を見聞きし、大工事を決意しました。  
何度も何度も現地を歩いて測量し、専門家と話しあって計画を練り上げました。



【ナレーション】  
しかし、この壮大な計画に皆が賛成したわけではありません。

【農民A】  
「そんな夢みたいな工事、一体誰がお金を負担するんだ？  
おらの家にはそんな余裕はねえ！」

【農民B】  
「水路をつくっても、おらの家までは水がこないかもしれない。」

【農民C】  
「おらあ、今の作柄でがまんするだよ。」

【ナレーション】  
やはり反対する農民たちも多かったです。

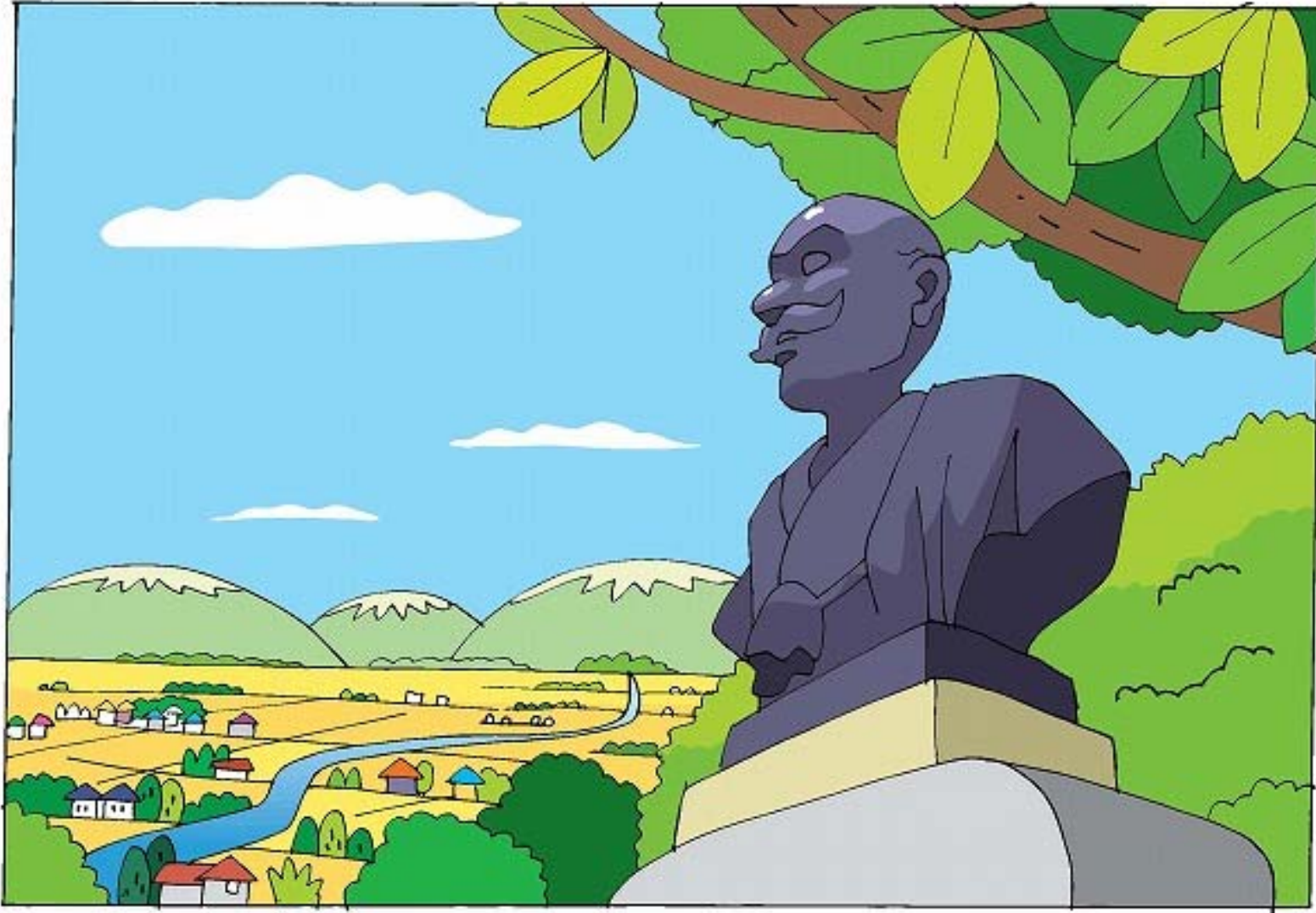
【懐徳】  
「みんな、この水路が出来たら、ますます江刺の農業は発展する。」

我々の子供たちや、孫たちが豊かに安心して農業を続けるため皆で力を合わせてくれないだろうか。」

【ナレーション】  
反対する人をまとめるのは、とても大変でした。しかし懐徳は「この計画は必ず江刺の人々を幸福にするものだ」という強い信念で説得を続けました。

やがて人々も懐徳の農民の幸せを願う気持ちを理解し、工事が進んでゆく事となったのです。

## 江刺の小澤懐徳



【ナレーション】

こうして、江刺平野には十分な水がゆきわたるようになり、米どころとしてますます発展していきました。

懐徳は六十四歳で生涯を終えましたが、その偉業をたたえる公園には、胸像と歌碑が建てられました。

都には、あこがれるるとも

村人のつちかう業を

捨ててなるべき

これは「はなやかな都会に憧れることがあっても、農民が大事に育てた農業を捨ててはいけないよ」という懐徳の思いをつづった歌で、この思いは、今でも江刺の農業に受けつがれています。

おしまい